

『パラグアイが語る日本人移住の物語』 — 当地紙の別冊特集記事【日出ずる国から来たパラグアイ人】より—

第1回パラグアイ便りにも書いていますが、この国への日本人移住が始まったのが79年前の1936年でした。ブラジル政府の政策変更でブラジル移住が大幅に制限されたために、当時ブラジル拓殖組合専務として移住事業に携わっていた宮坂国人が隣国パラグアイを適地と判断し、アスンシオンから130キロ南東のラ・コルメナという地に入植地を購入します。次いでブラ拓主任の笠松尚一技師らが測量機器などを携えて現地入りしたのが同年5月15日で、今でもこの日が入植記念日となっています。

やがて同年6月にブラジルからの指導移民10家族が、次いで8月に日本からの第一次移民団11家族、81人がはるばる神戸港から2か月の長旅で到着します。

当時パラグアイには南米で最初の鉄道が敷設されており、首都アスンシオンから薪炊きの汽車で4時間かけてイビチミ駅に降り立ち、さらにそこから牛車で12時間かけて最終目的地のラ・コルメナに入植しました。これが物語のはじまりです。



(入植初期ラ・コルメナ移住地の高等小学校)

こうして来年はパラグアイ移住80周年記念を迎えることとなります。すでに当地の日本人会連合会を中心に各関係者で様々な行事の準備や各種の企画を進めていますが、その一環として先日当国の主要新聞社“Ultima Hora”(ウルティマ・オラ)紙が日本人移住の歴史を取材し、別冊特集号で『日出ずる国から来たパラグアイ人』というタイトルで掲載しました。

移住第一陣で存命中の一人の女性の物語として始まるこの記事は、移住先駆者たちが当初の苦勞を乗り越えて徐々に生活基盤を築き、さらに第2次大戦後に始まる戦後の政策移民の受入れ側として勞をいとわず環境整備にあたる、その足取りを描いています。

さらにこの特集では、移住者が持ち込んだ文化や価値観に敬意を示し、戦後の日本政府からの有形・無形の資金支援や技術援助がパラグアイ発展に大きく貢献したことも、その具体的な事業を列挙しつつ多くを言及しています。

また日本文化を継承しつつ、一方で受け入れ国パラグアイに同化していこうとする理念から、積極的に現地の人との婚姻をすすめる一人の先駆者の家族を紹介することで、将来のより開かれた日系社会の姿をパラグアイにとって肯定的に捉えているのも興味深い点です。

ここで本文中、ラ・コルメナ日本食堂の写真説明の中で「日本人移民の母」として紹介されているアグスティーナ・ミランダ・ゴンザレス女史(1916～2007)について述べます。彼女は入植4年目にラ・コルメナ移住地小学校の若き校長として赴任しますが、やがて第2次世界大戦で日本が敵国になり(この事件は掲載記事にも書かれています)、移住地が大きな危機を迎えます。まだ経済基盤も整っていないこの初期の段階で、さらにこの苦境を迎えた移住者の焦燥も想像に絶するものがありますが、こうした逆境の中で、ミランダ女史は日本語教育の存続も含め日本人社会を庇護すべく奮闘し、移住者と一体となってこの困難な時代を乗り越えます。



(戦前の和服姿のミランダ校長)



(1985年来日時、両陛下に拝謁するミランダ女史。
左は女史の養女で当館職員のコティ・リバスさん)

戦後は1951年からストロエスネル政権の大統領府官房副長官などの要職に就いて移住者を陰日向なく応援し、またストロエスネル失脚後は一転不遇に転じますが、今度は彼女が育てた日本人の教え子達から手厚く庇護を受けながら、終始、最後まで変わることなく日本人移住者社会に温かい目を注いでいた方でした。

それでは以下に特集記事『日出ずる国から来たパラグアイ人』を紹介します。本記事の実現に尽力された日本人移住80周年記念祭典実行委員会(奈良マルティン委員長)に謝意を表します。なお翻訳は当館石田健人君が手伝ってくれました。

上田善久(大使館 2015年6月)

当地『ウルティマ・オラ』紙の別冊特集記事(2015年5月)より



《 表紙: 帝国からの贈り物 》

日本人移住者の到来で新しい文化・習慣がこの国に持ち込まれた。
移住 80 周年を迎えるにあたって、日系人の暮らしが友情の歴史を物語る。

【 日出ずる国から来たパラグアイ人 】

— 80 年前に始まった日本人移住はパラグアイに勤勉な人々をもたらした。彼らはパラグアイの発展に寄与しただけでなく、今日、パラグアイ文化に深く根着いている文化・習慣も持ち込んだ。これは、ある実り多い友好の物語である。—

幼い“とよ”は、これから自分の家になると告げられた場所を見渡した。日本の神戸港

からアルゼンチンのブエノスアイレスまでの2ヶ月に及ぶ船旅の中で、少女の頭には様々なイメージが駆け巡っていた。長い航行を終えて次の旅路、パラグアイの首都アスンシオンまでの船旅である。首都で列車に乗り換え、そこからイビチミと呼ばれる駅に行く。彼女や家族を迎えてくれるはずの奇妙な名前の国のすばらしいイメージを、彼女の想像力は数え切れないほど



(カピアタ柴田野菜農園での移住者柴田かほる。

息子の大作、嫁智恵と。)

描いていた。

しかし期待は外れる。目の前には果てしない原始林が広がっていた。“とよ”は何かおかしいと思ったが、両親は彼女の懸念が現実であることを認めるだけだった。この場所こそ、これからの生活の場だったのだ。彼女は7歳にして未来は戦いと労働だと悟る。しかし一方で、同胞と同様、これからの前進に十分な粘り強さを備えていた。

1936年春の、あの緊迫した晴れ渡った日は遠い昔のようだが、鈴木とよ(注:原文では Toyo Suzuki de Kanazawa。金沢氏との婚姻後の姓名の当地表記。)は昨日のこのように思い出す。今日ラ・コルメナ市と呼ばれる、当時はパラグアイ県の辺鄙な土地にたどり着いた11家族が乗り越えねばならない困難を話し始めると、涙が止まらなくなる。この物語の少女は、パラグアイにやってきた日本人移住者第一陣の生存者4人のうちの一人だ。

〔民間の事業〕

“とよ”は今86歳でほとんどベッドから起き上がれない。でも彼女の人生は、他の移住先駆者と同様にひとつの模範である。彼等がここに来られたのは、ブラジル移民で事業家の宮坂国人が、同胞がパラグアイに定住できるように11,000ヘクタール以上の土地を購入したおかげだった。それまでに宮坂は、多くの家族に日本を離れて海外で新しい機会を探すよう働きかけていた。つまり、このアジア移民の到来は専ら民間の発意による事業だった。当時の日本帝国は産業化と急激な経済発展のまっただ中だったが、一方で、よりよい将来を探す貧困層も存在していた。ラ・コルメナ地区に入った移住者は家族当たり20ヘクタールの土地を受け取る。当初は木小屋住まいで、各家庭は家を建てる必要があった。持ち込んだ米の種子を近くの湿地帯に播いた。生き抜くために、最初の数か月は近郊のイビチミで食料を調達した。

移住第一陣81人の到着以降も順次新しい移住家族が加わるが、第二次世界大戦が勃発した1941年に日本人海外移住は中断され、この状況は1952年まで続く。

この1941年の入植者のなかに、石橋亘治・マサエ夫妻とその子供達があった。子息の一人朝隆は、「ラ・コルメナ地区は道路未整備で農作物を他の町に運ぶ手立てもなく、自家消費に当てるほかなかった」



(ラ・コルメナの日本食堂。日本的飾りつけとともに、
〈日本人移民の母〉と呼ばれたアグスティーナ・ミランダ女史の写真が掲げられている。)

と語る。そのままでは前進する術もなく、他の道を探すために石橋亘治は家族を連れてイビチミ駅で汽車に乗り、エンカルナシオン市へと出発した。

「駅に着くとすぐに、父は逮捕されました。」と朝隆さんは回想する。第二次世界大戦も終結が近づき、パラグアイ政府は米国の圧力で連合国の敵国に宣戦布告する。日本はその敵国だった。幸い監禁は長引かず石橋一家はエンカルナシオンの高台に居を移した。そこでドイツ人家族と出会い、農場整備と収穫作業と引き替えに 14 ヘクタールのアブラギリ農園を一つ任された。1日 20 時間労働で6歳と8歳の子供の助けを借りて農園の作物全てを収穫した。

所有者のドイツ人は驚嘆した。20 人でも出来ない仕事をその小さな東洋人が成し遂げたからだ。石橋は農園に残るよう誘われ5年間農業に従事した。石橋亘治は自由に使える1ヘクタールを使って、イタプア県に定住する他国一主に旧オスマントルコ帝国領一移民の需要の多い野菜を栽培する。やがて県内一の野菜生産者になり、儉約し資本を作った。

1947 年のパラグアイ内戦は多くの同胞や外国人に激しい打撃となった。勝利した党派は、この機に乗じて武力で他人の財産を奪い取った。サンタマリア河畔の農園所有者であった二人のアルゼンチン人は、この蹂躪に耐えかねてパラグアイからの脱出を望み、石橋に有利な価格で農場を提供した。彼はこれを購入し、夏場には栽培されず消費もされなかったレタス、パセリ、クレソンなどの野菜の生産を開始する。マサエ夫人は野良着になって、エンカルナシオン市での販売のため収穫物を馬車で運んだ。彼らの作物を買うために、エンカルナシオン市対岸に位置するアルゼンチンのポサーダス市からも客がやってくるほどであった。

〔前進そして戦後の新移住者〕

石橋亘治は経済的に豊かになり、笠松尚一と『日本パラグアイ拓殖組合』を設立する。1952 年に日本・アルゼンチンとの国交回復により赴任した日本大使館員がパラグアイを訪問し、戦後の日本人移住事業を前進させるためにパラグアイとアルゼンチン両国の移住者と会合を持った。1953 年、カピタン・ミランダ地区 3,600 ヘクタールの土地にフェデリコ・チャベス移住地が建設された。ここでの農業生産は良好だったため、その後の多くの移住者への扉を開いた。

「農民は日本の2倍の収量を得ていました。パラグアイの地がどれだけ肥沃か、日本人たちがよく分るように写真も撮りました。歓喜が大きく、多くの家族が移住希望リストに自分の名前を載せました。」と朝隆さんは語る。

1955 年、大量の移住者到着を前にして、石橋亘治はフェデリコ・チャベス居住地隣接の土地に、フラム移住地 2,000 ヘクタールを購入する。翌年、日本国政府は『海外移住振興株式会社』を設立し、石橋学(石橋亘治の子息)と井上徹の二人の現地職員の仲介を経て、14,000 ヘクタールをフラム移住地付属として新たに購入した。この新しい土地は 1971 年にラパス地区となる。

1960 年、のちにピラポ移住地と改称されるアルトパラナ移住地が、石橋学と井上徹の斡旋で 84,200 ヘクタールの土地に設置された。翌 1961 年に石橋学は、父親の石橋亘治の移住者受け入れ事業開始後4番目となる 87,762 ヘクタールのイグアス移住地を開設した。

〔継承〕

日本人移住者に対するパラグアイ側の厚遇は他の日本国民の移住を促し、日本政府もこれを理解して、インフラ整備や開発事業を含む様々な無償資金協力や技術協力を提供した。イタプア県の移住地に対して実施された援助や協力により、西欧の移住者達の帰還が始まった。彼等は 1947 年から始まった権利の蹂躪により、次に生産物の輸送道路の未整備のため、パラグアイを去ってアルゼンチンに移り住んでいたのだ。

無償協力を通じて、林業開発センター、農業機械化センターや地域農業研究センターがイタプア県にて発足した。アスンシオンにおいては、中央研究所・熱帯病病院(LACIMET)、パラグアイ日本・人造りセンター(CPJ)、カルロス・アントニオ・ロペス職業訓練センター、国立心身障害者擁護院(INPRO: 現在は障害者権利擁護庁に格上げ)、家畜人工授精センター、国立癌・火傷病院、保険科学研究所など様々な組織が発足した。

日本人移住はパラグアイに進歩と発展をもたらしたのみならず、今日の日常生活で日本人移住先駆者の遺産とは認識されていないような文化習慣も持ち込んだ。

パラグアイ日系センター(セントロ・ニッケイ)会長の森谷リチャードは、今のパラグアイ人が食べている野菜は東洋人到来までまったく知られていなかった種類だと語り、「大豆の栽培も日本人の手によって始まった。」と断言する。また、土壌の浸食を避けるための播種システムである大豆や小麦の不耕起栽培をパラグアイに導入したのも日本人移住者だ。

世界の様々な地域で言われていることだけれど、パラグアイ文化の他の分野も日

本の影響を受けている。今日、若者から大人まで、カラオケやコスプレを楽しみ、アニメや漫画を消費する。これらは日本独自の文化現象であり、それと同時にその価値の伝達手段ともなっている。

日本人移住の物質的、文化的遺産は現在のパラグアイの形成に貢献してきた。私たちの国から距離的に遠く離れて存在するある国の市民が、過去にそして現在に至るまで影響力を持ち続けている。他のどんなコミュニティもこれほどの影響力は持たないだろう。これこそ素晴らしい友好の歴史である。 (以上)

《以下コラム記事》

〔日本人が移住しているパラグアイの都市・地方〕

パラグアリ県(ラ・コルメナ市)、イタプア県(フェデリコ・チャベス、ラパス市、ピラポ市、エンカルナシオン市の4カ所)、アルトパラナ県(イグアス市、シウダ・デル・エステ市の2カ所)、アマンバイ県(ペドロ・ファン・カバジェロ市)、アスンシオン首都圏の計9カ所で、それぞれに日本人会が組織されている。

〔釘のない家〕

関淳子はコルメナ地区初期に建てられた家屋に住んでいる。頑丈で心地が良く、椿や生け花に使用される赤い実をつける小さな万両のある中庭には、桜や梅の木が植えられている。自宅の生活は幸せで、世界のどこにも居を移すことはないだろう。

その家屋は、日本人移住者仲間の建築士が日本の伝統的な建築技術を使って、つまり



(写真左:関淳子さんと弟の奈良マルティン等。1936年神戸港出港前の移住第一陣の写真を手にとる。)

(写真右:86歳の鈴木とよさん。今でも79年前のラ・コルメナ到着の日を鮮明に覚えている。)

耐震用に釘を使わないはめ込み様式で、建てられている。

1936年、“とよ”は母親の腕に抱かれた乳児だった。神戸港で撮影された写真がその証で、進路を新天地パラグアイにむけて乗船した移住者81人の一人だった。“とよ”は一度だけ日本に戻り、そのとき日本を未知の料理が溢れるすばらしい国と思ったという。「だけど、一週間後にはもう帰りたかったですよ。プチェロ



(奈良家の庭に咲く桜)

(マンディオカ芋添えの骨髓煮込み料理)が恋しくて。」と話してくれた。

=====
[80周年記念]

パラグアイ日系人社会は2016年に移住開始80周年記念祭の開催を予定している。



(田中秀穂資料館には初期移住者の写真や家具が
展示されている。)

「最初の移住地ラ・コルメナは80周年記念祭での中心的な価値を持っています」と、日本人パラグアイ移住80周年記念祭典実行委員会広報担当の石橋道夫さんは語ってくれた。

ラ・コルメナ市に田中秀穂資料館がある。そこは移住団の医師田中秀穂の家があった所で、初期移住者の所有物や写真が保管されている。ラ・コルメナ市に立ち寄る人なら必ず訪問すべき場所である。市内のミヤサカ広場には記念碑と石像があり、宮坂国人氏はじめ移住先駆者に敬意と感謝の意を表している。

=====
[効果的で心のこもった統合]

石橋朝隆は日本人が食事で箸をどう使うのかを見せてくれた。日本人のように食べたいがどうも上手くいかない。我々は今、2日前のラ・コルメナ地区訪問から始まった旅行の最終地点、レストラン“Hiroshima”に来ている。彼がご馳走してくれる鮭料理をナイフとフォークで口に運ぶことを、ようやく認めてくれた。

石橋は日本文化を維持・普及しているが、それと同時に、移住者は迎え入れ国に同化しなければならないとも確信する。他の日系2世と共に、同化に最良の方法はパラグアイ人との結婚だと判断した。朝隆はマクシミナ・フロレンティンとの結婚でまず前例を示し、子供達もそれに続く。エドゥアルド道雄はスルマ・ポルティジョと、アルベルト富雄はレイラ・メルガレホと、ウンベルト光雄はホルヘリーナ・カノと、それぞれ結婚した。



（写真左：イタプア移住を拡大した石橋亘治。

中：父を継ぎパラグアイ女性マクシマ・フロレンティンと結婚した石橋朝隆。

右：朝隆の長男エドゥアルド道雄と妻スルマ・ポルティジョ。夫妻の長男エドゥアルド

亘治、次男ルーカス朝治、長女セステテ碧の3人。）

引き続き移住者支援を続けている。そして、今日まで日系人で犯罪に関わった者は一人もいないと、誇らしげに繰り返す。使命は達成されたのだ。

「父の亘治が実践したように、私の人生も日本人移住事業に捧げてきた。父が始めたイタプア居住地はその息子達によって引き継がれた。そのおかげで日本の技術協力が可能となった。」と朝隆は語る。

石橋は 41 年の勤務を終えて JICA を退職したが、

（ 以上 ）